

# 沖縄に基地を押しつけない 市民の会

「県外移設」の声は今も政治状況を揺さぶり、大きく動かし続けている。いまや沖縄人は、日本が米軍基地の存在とその暴力の主体であると感じ取り、その暴力の共犯者は日本人であると見抜いている。県外移設は、沖縄と日本の政治力学に変化をもたらした。

これまで保守対革新というイデオロギーによる日本の政治の仕組みの中で沖縄人は分断されてきた。「県外移設」が多くの沖縄人の共通認識となり、沖縄の政治はオール沖縄を生み出した。これは「沖縄のことは沖縄人が決める」という沖縄人の意思表示である。それは、いままでの日本の政治によって沖縄をコントロールできないことを意味する。

2013年11月、5人の自民党沖縄選出国會議員を並べた石破茂幹事長（当時）は「県外移設なんてとんでもない」と述べ、「沖縄のことは日本が決める」とばかりに5人を従わせた。しかし、明らかに権力者たちはうろたえていた。「県外移設」はとんでもない力を秘めていたのだ。それは琉球処分が1879年の過去の出来事ではなく、現在まで途切れることなく綿々と続いていたことを明らかにした場面である。そして、政治の主導権は沖縄にあると分かった瞬間でもあった。

## 県外移設が過去を逆射する。

あの復帰運動は何だったのか。絶対的力である米軍の存在を異民族支配と捉え、その支配からの解放のため島ぐるみ闘争を展開した沖縄。そして「異民族支配からの脱却」ということばに写し出された鏡の向こうに同胞を見つめ、日本が祖国とみえてしまった沖縄。復帰運動を支えた「異民族支配からの脱却」が目指した方向と、「県外移設」は正反対を向いている。そこには日本から沖縄へ復帰するための自立の思想を生み出すエネルギーがため込まれている。

「県外移設」は日本人の責任を問う。米軍基地問題は戦後の米軍による日本占領に始まり、1952年4月28日以降、アメリカによる日本支配は安保条約に引き継がれている。しかし、米軍基地を沖縄に集中させることで基地の暴力が多くの日本人の身体をすり抜けた。結果、安保は平和のためだと容認・支持する日本人が増えた。そこに差別が見える。

「基地はどこにもいらない」という平和運動の主張が基地を沖縄に押し付けてきたのではないかと悩み考え、差別と暴力の共犯を止めるために基地を日本に引き取る人たちが各地に生まれている。

沖縄人にとって、4・28 はもはや「屈辱の日」ではない。第何回目の琉球処分でもない。琉球処分は暴力を続けることに他ならない。「県外移設」とは単なる基地の移動ではない。琉球処分を終わらせる長い闘いの始まりである。沖縄は日本の未来とは違う未来へ向いて進んでいる。4月29日に「辺野古新基地建設を止めるもう1つの取り組み—県外移設を再確認する」シンポジウムにおいて、「基地引き取り運動への提言」が採択された。合わせて議論を深めたい。

政府は辺野古が唯一と強弁し、工事を強行した。いま、私たちは基地引き取りで辺野古を止めなければならない。

# 沖縄差別を解消するために 沖縄の米軍基地を 大阪に引き取る行動 略称「引き取る行動・大阪」

日本と沖縄のこれまでの歴史。

日本人が忘れてはならない日の一つ一つ。

1879年の「琉球処分」。

1945年、沖縄を「捨て石」にした沖縄戦。

そして、1952年、日本が主権を回復したと同時に、

日米安保条約を結び、沖縄を切り離し、

アメリカの統治下に置いた日。

1972年5月15日、沖縄は日本に「復帰」したとされるが、

「切り離し」の状況は今も延々と続いている。

「切り離し」という言葉は重く、

しかし、これまで日本が沖縄に対して

行ってきた行為のすべてを表わしてはいない。

つまりは、「琉球処分」から今に至るまで、

日本は沖縄を植民地とし、

ありとあらゆる手段を使って

沖縄を搾取してきたという事実がある。

「討つべきは日本政府という権力だ」という人がいる。

沖縄にとって、私たち、日本人の一人ひとりが、

その権力者、そして植民者ではないのか。

日本総体として沖縄にふるわれている暴力の責任の一端を私もあなたも負っているはずだ。

その姿がもっとも見える形で現れているのが、

一連の米軍基地の押しつけであり、辺野古の強行である。

私たちはいつのときも沖縄を取り込み、懐柔し、

あるいは無視し、

ときには暴力によってねじふせ、一方で、安全で安寧な生活を享受してきた。

基地を引き取ることが、

植民者をやめる一つの確かなステップになると考えている。

まずは、普天間基地を日本・大阪に引き取ることによって、辺野古を止めたい。

米軍基地という暴力について、

改めて、自分の身体で考えることが求められている。

なぜ、安保を8割以上の人が支持しながら、

私たちの空には戦闘機が飛ばないのか。

そのどうしようもない現実を乗り越えるために、

「基地引き取り」の議論に参加してほしい。